



## 雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1  
 TEL : 03-3611-0573 FAX : 03-3611-0574  
 H.P : <http://www.skywater.jp/>  
 e-mail : [office@skywater.jp](mailto:office@skywater.jp)

# 見所、聞き所、いっぱい!

雨水東京国際会議 8月1日～6日

### 基調講演・雨水サミット・特別報告

8月5日(金)の全体会(メインフォーラム)の基調講演の講師は、水資源の国際的管理の権威であるビスワス博士です。この日は、実行委員会会長の辰濃和男氏の基調報告、国際雨水サミット、そして、韓国、ドイツ、インドの雨水活用の特別発表、そして海外からの参加者も交えた交流会と続きます。世界を取り巻く水危機の現状やその解決策としての雨水の有効活用に関する最新の実践事例など、普段なかなか聞けない情報を得るにはとてもよい機会になると思われます。

### 分科会・展示・雨水お茶サービスなど

6日(土)(一部5日)の分科会では、大洪水、大湯水、大地震及び安全な飲み水の不足など、21世紀の世界の水危機の切り札としての「雨水の有効活用」をいかに社会の仕組みにしていくのかが話し合われます。この他、水循環を活かす農業やこれからのアジアの雨、雨の体験型環境学習など、全体で8つの分科会においてさまざまな実例報告や研究発表などが行われます。

また、1日午後から6日午前中にかけて、メイン会場となるすみだリバーサイドホールの屋外のうるおい広場において、雨水の貯留、浸透及び利用、屋上緑化や壁面緑化など、環境関連の企業展示が行われます。

7(日)には、墨田区内の雨水活用施

設の見学会と合わせ、ワークショップが行われます。会場は、第二会場となる墨田区内の環境学習施設「すみだ環境ふれあい館」です。この日には、現在、本会議に合わせて開設準備が進められている雨水ハウスが完成しています。この雨水ハウスに展示してある雨水の貯留、浸透及び利用の実物を見ながら、ドイツの雨水利用建築士の第一人者であるケーニツヒ氏ら海外招待者も交えて、意見交換が行われます。ドイツでは、すでに雨水機器の規格、D I Nができています。また、雨の絵本コーナーも、これまた必見です。

### ポスターセッションや自由発表など

このほか、国内外の雨水に関する自由発表とポスターセッションが、それぞれ、3日(水)と4日(木)に行われます。また、ポスターセッションと同じ時間帯ですが、この日は、雨水に関する自治体セッションも行われます。ここでは、雨水利用自治体担当者連絡会がとりまとめた、雨水利用に関する窓口相談マニュアルや事業者向けの指導マニュアルの発表があります。

全体会、分科会、自由発表など、いづれも、通訳が付きますから、ご心配なく。今年の夏休みは、雨水東京国際会議のために、時間を空けておいてください。そして早めに参加の申し込みを！  
 (事務局)



### 雨水市民の会総会

- ぜひ参加を

6月19日(日)午前10時30分

### 目次

#### 2P 百花繚乱の分科会

- 安全な飲み水としての雨水 / 雨を捨てない保水型都市へ
- 3P 雨の環境学習 / 雨の貯留・浸透と活用技術 / 雨水を活かした緑豊かなまちづくり
- 4P 緑のダム - 雨水利用から考える水源自立 / 水循環を活かす農業 / これからのアジアの雨
- 5P 雨の絵本ひろば / 雨と浮世絵 / 雨水利用を進める政策
- 6P 雨水資料室がリニューアル / 向島散歩 - 雨水利用の原点を見る / "Rainwater & You" のCD-ROM が完成
- 7P スリランカ雨水利用緊急支援 / スカイウォータープロジェクト報告
- 8P 第3回あまみず公開セミナー「雨と土と農業の現場から」
- 9P 風コーナー  
秋山眞芸実さんが「ムラセ係長、雨水で世直し！」出版 / 大田区と鎌ヶ谷でタンクづくり実演 / 雨水田んぼ&ビオトープ
- 10P 2005年度雨水市民の会総会にぜひ参加を / 雨アツマーレイ - インド・チェンナイRWH視察報告



## 百花繚乱の分科会

8月6日(一部4日、5日午後)

### 安全な飲み水としての雨水

二つの企画があります。

一つは、すみだリバーサイドホール・アトリウムで行う体験コーナー「雨水生活をしよう!」です。トイレの洗浄水や植木の水遣りだけではもったいない!洗濯や風呂の水に、飲み水にと、どんどん使い道を広げよう。雨水を肌で感じたり眼で見たり、雨水のいろいろな使い方を考えたり、そして、自転車をこいだりシーソーをして雨水をろ過し、お茶が飲めたりとちょっと楽しい雨水ワールドを企画しました。

二つ目は、すみだリバーサイドホール・イベントホールで行われる「安全な飲み水としての雨水分科会」です。地下水のヒ素汚染や塩害化に悩むバングラデシュから、プラマニクさんとヌルツァマンさんにその対策としての雨水利用の報告を、去年の12月に起きたスマトラ沖大地震no津波被害があったスリランカからは、アリヤナンダさんに雨水利用を取り入れた復興計画の報告を、

市民の会から徳永暢男さんに防災と雨水利用の報告を、オーストラリアからは、生活の全てを雨水で賄っている体験報告をキャロルさんからしていただきます。(今関久和)



大津波に列車が呑まれた(スリランカ)

### 雨を捨てない保水型都市へ

- 雨と生きる都市の水循環のしくみをつくろう

雨を無意識に流し去るのではなく、都市に保水しながらゆっくりとした水循環を形成する。そのためのさまざまな技術がありますが、それを地域で根付かせていくためにはどんなことが必要なのでしょう。保水機能を失った都市では気象の異変が起きています。そのことに都市生活者が気付き、コミュニティレベルの雨や水への関心が高まって、一人ひとりの行動につながる、そんな流れを作り出すための仕組みについて議論します。

ドイツのベルリンでは、雨水排水の料金を徴収しています。韓国のソウルからは、雨水貯留のネットワークで治水・利水に役立てる構想を紹介してもらいます。もし、日本でも市民が汚水の排除と同じように、雨水を排水することにも責任や負担が求められるとしたら、各家庭やコミュニティレベルの雨水はどのように扱われるのでしょうか。きっと多くの人たちが自分の敷地から雨水を流さない工夫を始めると思います。そして雨水をコミュニティでどう使ったらいいか、さまざまなアイデアも生まれてくることでしょう。自治体は雨水排水にかかる負担が減った分、市民が積極的に動けるようサポートすることもできるようになります。

こんな協働関係によって、乾いた都市から保水型都市への流れが加速していく、そのための第一歩となるよう、知恵を出し合ひましょう。

(酒井 彰)



## 雨の環境学習 - 雨水に学ぼう！

「すみだ環境ふれあい館」の2部屋を使い、「雨を通じた日本の風土・暮らし・文化から、自然を敬う感性を育み、雨の大切さを感じ、学ぼう」の合言葉で、講演や体験学習を行ないます。

一つは、大人を対象に、雨の授業の実践についてお話してもらいます。元小学校教師の笠井守さんには、小学校で行なった「雨水集め大作戦！」の授業を作り上げるまでの話、向島百花園の佐原滋元さんには、地元での子どもたち相手の実践について、インド雨水センターのシャカールさんからはインドのユニークな雨水学習の実践について聞きます。

もう一つは、子供を中心に、実験や工作を含む体験授業を行ないます。雨水市民の会幹事の人見達雄さんには、五感をいかした身近な水でのサバイバル体験とペットボトル等を使った工作を、権上かおるさん(酸性雨調査研究会) 岐美宗さん(広島商船高専) 溝口さん(岐阜サイエンスワールド) たちには、酸性雨の鑑定や排気ガスを使って酸性雨を作る実験などを実演してもらいます。

(原田龍彦)



## 雨水の貯留・浸透と活用技術

これから雨水を貯めてトイレの洗浄水、洗濯用水、花壇の散水などに利用していこうと思っておられる方々へヒントを与える体験学習施設「雨水ハウス」の建設に着手しました。「すみだふれあい館」の中庭に建設中で、木造平屋建、建築面積約20平方メートル、完成は7月初旬を予定しております。ハウスの周囲には、本格的な雨水貯留タンクと地下浸透ますを備えたものから、マンションのベランダなどにも使えるものまで、色々なパターンの器具を一堂に展示し、雨水の活用技術のノウハウを実物に触れながら学習することができるようになっています。バングラデシュでの取り組みも特別展示します。

室内には、節水トイレの実物モデルや、水道水と雨水をワンタッチで切り替えられるロータンク切替弁、床下に収納できる薄型雨水タンク、きれいな雨水を貯めるための初期雨水カット装置などを展示する予定です。

また、6日の午前には、墨田区役所を会場にして先駆者が語る雨水活用技術の極意についてディスカッションする場も設けます。

(中谷耕太郎)



## 雨水を活かした緑豊かなまちづくり

この3月、台東区の西河氏(ひとまちCDC代表)にお願いして、とても楽しく充実した谷根千歩きの会を開催することができました。地域の人々に支えられた身近な緑は、この街の貴重な財産として輝いていました。実際に歩いてみて、鎮守の森から小さな鉢の緑まで、緑の大切さや役割を再認識・発見すると同時に、地域の人々のつながりが緑豊かなまちづくりの「カギ」ではないかと感じました。

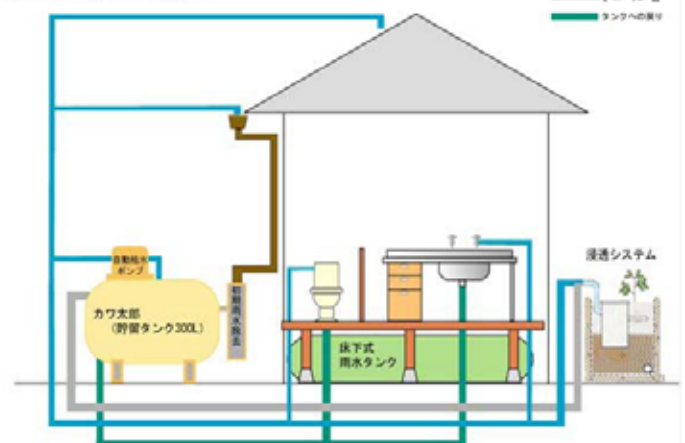
まちづくりは、長期的な視野でローカルな実践をひとつひとつ積重ねる作業です。雨水をまちづくりに活かすためにも、日常的に雨水を利用する生活者の視点と地球的な水循環の問題を考えるグローバルな視点をもつ人々が集って初めて実現し、街に根付くのではないのでしょうか。

分科会では、まちづくりや都市の緑化に携わっている方々から様々な問題点や可能性を伺い、市民にできること、産学官との協業でできることなどを探り話し合いたいと思います。

また、定例会で浮かび上がったいくつかの疑問、「何故、東京の校庭には土がないの?」「東京の緑の今、緑被率の変化」「東京と大阪の緑と暑さ」など、それぞれパネル化して問題提起を行う計画です。

(松本正毅)

雨水ハウス  
雨水生活・浸透システム





## 緑のダム - 雨水利用から考える水源の自立

日本は今、コンクリートダムを造って治水・利水を行う方法が環境的にも財政的にも行きづまっているのではないのでしょうか。

いち早く脱ダム宣言をした長野県は、森林整備に着手しています。森林整備や「緑のダム」づくりで地域の再生への取り組みを試みる県もあります。これに対し、定量化できないから治水対策としては認めないと主張し続ける国の姿勢。吉野川流域などでは、住民自らが「緑のダム」機能を検証し、河川政策の転換を求める議論も高まっています。

雨水を土壌に蓄えて、徐々に川へ流出させ、大雨が降れば、しっかり受容して洪水緩和機能を果たす森林。森と川をつなぐ「緑のダム」は健全な水循環の要です。「緑のダム」づくりは山間地だけでなく、流域全体で取り組む課題のはずです。下流域とりわけ都市部でも、雨水を活用し、地下浸透させて都市の水循環を回復させる努力が必要です。

第三世界水管理センター所長のアジット・ビスワスさんや韓国の水資源開発研究者の発表により、グローバルな視点でも「緑のダム」を捉えて、コンクリートダムの代替案としての可能性を探ります。

(田中清子)



## 水循環を活かす農業 - 棚田やため池に学ぶ

今回の国際会議で、「農の世界」をテーマに掲げた唯一の分科会です。モンスーンの影響が大きいアジアでの共通項として、雨水を活用した稲作文化が重要な位置を占めています。近代化、工業化の過程で日本農業に歪みが増し、多くの課題を抱えているだけに、その全体像を捉えるのは困難です。しかし、雨水を切り口に農の現場からの実践例に学べば、未来に向けて「アジアの中の日本」が、どうあるべきかも、より鮮明になるのではないのでしょうか。『フィリピン国ボンタク村』(農文協刊)の著者、大崎正治さんが実行委員として、フィリピンの棚田耕作者の招聘に尽力されるなど、多彩な顔ぶれで進行中です。

フィリピン先住民の棚田の水利と石垣造り...ジェフリー・ポーセンさん(棚田耕作者) なぜ棚田の復興に立ちあがったか...(山古志村住民交渉中)

ため池文化を守ろう...長町博さん(香川用土地改良区相談役) 水を活かし環境を守る日本農業の可能性...館野廣幸さん(有機稲作農民)

また、ポスター展示では、「水循環を活かした農業でどこまで食料自給が可能か」をテーマに、真下俊樹さん(大学講師)が取り組み中です。

(矢間秀次郎; A T T 流域研究所)



## これからのアジアの雨 - その量と質はどうなるか

雨水の量と質はこれからもずっと変わらないのでしょうか。私達は今の延長線上に未来があると安易に考えがちですが、最近の気象研究によれば、必ずしも私達に都合の良い未来が待っているわけではなさそうです。

そこで、8月5日夜に予定されているこの分科会では、地球温暖化による地球的な気候変動がアジアの雨の量や降り方をどのように変えるのか、また人間活動による大気汚染がアジア地域に降る雨の質にどのような結果をもたらすと考えられるのか、それ

らについて理解を深めるために専門家による講演を計画しています。

また6日の午後は、他の分科会の話題も含め、「雨水利用」というテーマが、大学で学ぶアジアの若者達に期待している課題は何かを、自由な討論を通して考えたいと思います。アジア諸国から留学している学生や、アジア諸国に関心のある日本の学生の参加をお待ちしています。ここが若い人たちの新しいネットワーク形成の場となることを願っています。

(風間ふたば; 山梨大学)

### 雨水東京国際会議実行委員会事務局から(その1)

## ボランティア募集!

会議当日の受付や会場案内、また海外からのお客様の通訳などみなさんの能力を発揮できる場がたくさんあります。ぜひこの機会にご参加ください。また身の周りの方への働きかけもお願いします。申込み・問い合わせ = 実行委員会運営事務局 (ダイナックス / 電話: 03-3580-8284 / Eメール: office@tap-skywater.jp まで)

## 雨の絵本ひろば

質屋21協同組合さんの寄付により、「雨の絵本ひろば」の企画が具体化することになりました。4月16日に、絵本ひろばとなる「すみだ環境ふれあい館」に有志が集まり、備品の取り外し・搬出、窓ガラスを中心に部屋の清掃に汗を流しました。また、業者をお願いし、床の清掃やワックスがけ、壁の塗装などの内装工事が完了しました。

今後の作業としては、展示のための本の選定や購入、展示、本のカバーかけなどの作業のほか、地域への情報宣伝の方法やチラシづくりなどをしていく必要もあります。

また、読み聞かせなどのイベント企画やひろばの運営等についても詰めなければなりません。現在のところ、6月下旬にメンバーで読み聞かせの練習、7月18日にすみだ学習ガーデン(墨田区東向島2-38-7)で読み聞かせをすることが決まっています。

国際会議では、6日にイベントを組む予定でいますので、その中身についても今後詰めていく予定です。  
(上林裕子)



内装が仕上がった絵本ひろば。雨の絵本寄付、大歓迎です。

### 雨水東京国際会議実行委員会事務局から(その2)

#### ポスター展示募集！

会議の期間中、すみだリバーサイドホール・ギャラリーにおいてポスター展示を行います。雨水に関する調査研究や実践されている取り組みなど、この機会に発表してみませんか。また8月3日午後にはポスターセッションもあります。国内外からの参加者にあなたの取り組みを直接発表する貴重な機会となります。

#### 出展企業募集！

雨水や緑化の関連企業が墨田区役所うるおい広場に集まります。先進的な技術・製品の展示ならびに情報交換の場として、有意義な機会となります。現在、出展を希望する企業を募集中ですので、是非お申し込みください。

いずれも申込み・問い合わせ=実行委員会運営事務局(ダイナックス / 電話:03-3580-8284/EM-ル: office@tap-skywater.jpまで)

## 雨と浮世絵

雨を描いた浮世絵が、現在、100点ほど集まっています。「雨と文芸」の特集号のために収集したのですが、紙面の関係で掲載できなかった浮世絵がずいぶんあります。国際会議ではそれらの絵をできるだけ多く、区役所1階のギャラリーに飾り付けます。

初めてご覧になる絵もたくさんあると思います。静かな雨の風景や、夕立ちに慌てる雨やどりの様子や、洗濯物を取入れたりする様子など、暮らしが描かれたものもあり面白いです。また、吾妻橋、駒形堂、隅田堤、両国や向島などの絵は、遠い「故郷」にタイムスリップする感覚を覚えさせてくれます。

国際会議では、当時の雨具なども展示して、身に付けてもらったり、お話をしたりする予定です。どうぞ、お楽しみに！  
(糸賀幸子)

## 雨水利用を進める政策

- 自治体によるセッション(8月4日午後)

墨田区は災害時の対策として、公園の地下などに4,923トンの水を確保しています。しかしこの数字は23万人の区民一人当たり20リットル程度のものでしかありません。また阪神淡路大震災の際には、飲料水以上にトイレの流し水など生活用水の不足が大変深刻な問題となりました。その教訓を活かすため、墨田区では建物の地下に雨水を貯める計画を進めており、現在10,000トンを越える雨水が貯留されています。

今後もマンションなど大規模な建物の建設に際して、雨水の貯留と利用の協力をしてもらいます。しかし、他の自治体ではその必要性を痛感しながらノウハウや経験がないばかりに計画を進められないところがたくさんあります。

そのため、今回、一般の住民向け新築ビルへの導入 不用浄化槽の雨水貯留槽への転用の3つのマニュアルを作成し、発表します。また、海外からも自治体関係者を招待し、「雨水利用の際の下水道料金の減免の制度化(ドイツ・ベルリン市)」「ソウル大学での雨水利用の取り組み(韓国・ソウル市)」について同時通訳付きで発表いただく予定です。

(高島 修; 墨田区役所)

## 雨水資料室がリニューアル

### その1 壁面を三宅島の熔岩でリニューアル

すみだ環境ふれあい館入口の門や玄関の壁面を三宅島の熔岩で覆い、一部を緑化します。水源はもちろん雨水を活用します。三宅島では、4年ぶりに島民の皆さんが帰島し、生活再建が始まりました。三宅島の熔岩の活用が、地元の経済の活性化につながればと思います。三宅島では、何百年も前の昔から雨水を飲んできました。これを機に、すみだ環境ふれあい館が三宅島との交流のふれあい場所になっていければと思います。

### その2 資料室の展示物を明るく、見やすく

区からの委託を受けて、雨水市民の会が企画・製作した雨水資料室は、3年が経ち、壁面のビニールシートがはがれてきました。そこで、区は、展示物がより見やすいように、壁面や展示物をデザインした松本正毅さんのアドバイスをいただきながら、全面的に手を入れます。廊下などの照明もスポットライトに替え、明るくします。また展示物には、音声サービス装置が取り付けられます。(村瀬 誠)

## 向島散歩 - 雨水利用の原点を見る

墨田のまちを歩くと、路地尊や天水尊が目につきます。雨水を活かした緑豊かなまちづくり分科会が、「路地の園芸から下町・人のまちを再発見」と銘を打って、5月7日(土)に向島の路地歩きを企画しました。案内人は、国際会議実行委員で向島百花園「茶亭さはら」の亭主でもある佐原滋元さんでした。「住民でない者が路地歩きをするときは、会った人に挨拶をしたり、お辞儀をしたりするのがマナーです」と佐原さん。午後の雨上がりのさわやかな空気を吸って、12名がプウプウと路地歩きをしました。

路地は庭のない家が密集していると思っていましたが、全然違ってました。実によく管理された鉢植えや壁面緑化があちこちにあり、緑と花にあふれるまちでした。そして、まちの人に挨拶をして「これは何の花ですか」と気楽に話もできました。もちろん路地尊を数箇所訪ねました。そこにも植木が必

須のアイテムとして置かれていました。

雨水利用というと、大きなタンクやポンプを使った設備を考えがちですが、ただバケツを置いて雨をためて植木に使う「路地園芸の雨水利用」は単純で誰でもできる雨水利用の原点かもしれません。

(高橋朝子)



(上)風呂おけをタンクに、手づくり雨水利用

(下)路地の緑をカウントしない緑被率は低くても、実際に見える緑視率は大きい



「やってみよう雨水利用」の英語版

### “Rainwater & You”のCD-ROMが完成

会員割引で1500円領布

なんと便利になったものです。OCR【光学式文字読取装置】で、連続して画像として読み取り、文字を識別して文書に自動変換。データにより誤変換もあるようですが、PDFファイルの見える部分は、画像のままですので読むのに問題はありません。見えない部分にテキストが隠れていて、テキストでの文字検索が可能です。なるほど…。わかりましたか。PDF化の費用も安価になっており、予算内で、会のすべての調査報告書もPDF化する事が出来ました。合わせて在庫切れだった本(A5版)も、B5版に拡大し350冊増刷しました。英語版CD-ROM:2000円のところ会員割引で1500円でお分けいたします。

(情報部会 松本正毅)



広重「大はしあたけの夕立」をデザインしたCD-ROM

## 海外編

## スリランカ雨水利用緊急支援



スリランカの雨水利用市民団体、「ランカ雨水利用フォーラム」からの要請を受け、徳永副会長と村瀬事務局長の2人が、2月11日から15日にかけて、スリランカの津波被害現場の調査と雨水利用の支援を行ってきました。

同フォーラムの案内で、コロンボからゴールの海岸沿いを中心に被災現場を見てまわりましたが、漁船が道路に打ち上げられたり、船体が真二つに割れたり、多くの家屋が全壊したりで、津波の被害は、当初の想像を超えるものでした。多くの井戸に海水が入り、仮設住宅の飲み水は、NPOや政府、国連などの応急給水に頼っていました。

また、同フォーラムコーディネーターであるアリヤナダ女史の手配で、2人は、直接、スリラン

カの都市開発・水供給担当大臣やコロンボ市長に直接お会いすることができ、復興計画に雨水の活用を取り入れるよう助言してきました。また、面談後、村瀬事務局長が、約1時間にわたって、政府関係者に雨水の活用についてレクチャーしました。

3月17日、アリヤナダ女史からの復興住宅の雨水利用デザインに関する問い合わせが村瀬事務局長に寄せられ、同事務局長は、雨水の集水、貯留及び処理技術に関して、ポイントをアドバイスしました。

なお、8月6日の雨水東京国際会議における分科会「安全な飲み水としての雨水」で、津波被災後の現地での雨水活用の取り組みが、アリヤナダ女史から報告される予定です。

## スカイウォータープロジェクト 報告(その1)

市民の会では、ヒ素で汚染された地下水に替えて、豊富な雨水を活用することでバングラデシュの人々の生命を救えないかと考え、2000年からスカイウォータープロジェクトに取り組んできました。なにしろ、この国の年間平均降水量は日本の1.5倍近い2500mm、その可能性は十分にあります。

2004年7月には竹製集水キットを開発し、2004年には約160基取り付けすることに成功しました。雨季の半年間は、このキットを使うことによって、ヒ素の摂取量を半減できます。費用は一基約2ドルです。1日1ドル以下で暮らす人々にも手が届きます。問題は、乾季です。乾季を乗り切るには、乾季の水をまかなえるだけの容量を持った雨水タンクがどうしても必要になります。しかし、従来の3トン規模の雨水タンクは、15000円以上もして、一般市民にはなかなか手が出ません。誰もが設置できるようなもっと安価なタンクができないものかと、現地NPOと試行錯誤した結果、ついに、現地でトイレに使っているコンクリートリングを活用した雨水タンク(リングタンク)の開発に成功しました。コスト

はこれまでの約半分です。

徳永副会長と村瀬事務局長は、2005年1月4日から約1週間かけて、リングタンクの設置現場を見学し、村人たちにタンクのデザインやメンテナンスに関して助言してきました。2004年12月から2005年3月にかけて、海岸部を中心に135基のリングタンクが設置されました。これからの雨季が楽しみです。



生命を救う雨水タンク。PR-JAPANは雨水市民の会の意味。

## あまみず公開セミナー報告

## 第3回 1月29日 「雨と土と農業の現場から」

すみだ環境ふれあい館 参加者 21 名

## 第1部

「根ノ国」(菊地周製作、1981年東京写真工房作品24分)

上映と製作裏話 菊地文代さん

映画の主人公は、土の中で生と死を繰り返す虫、ミミズ、細菌などです。太陽と水と空気に生まれ、彼らは、糞をして土を肥やします。死骸は分解されて栄養分となり、植物の根に吸収され、茎や葉、花へと送られます。一方で植物の根は絶えず微生物の餌となる養分を出しています。

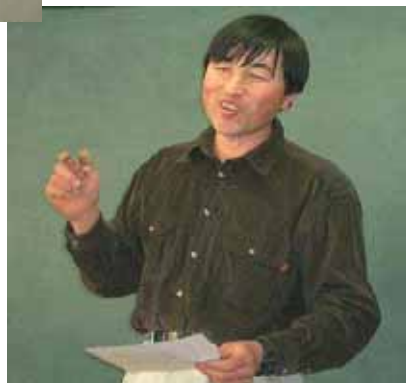
上映後、故菊地周夫人、文代さんから映画にまつわる話を伺いました。

二十数年前に有機農業を営む熊本の生産組合から映画の製作を依頼されました。当初、実験農場で近代農業と有機農業の差をみる試みをしましたが、化学肥料で育てると窒素分が多いためか緑色が濃くなり、映像で見るとしっくりきませんでした。その後、世田谷の大平農園を訪れ、実際の有機農業を目の当たりにして、あの映像を実写しました。透明な箱を使い、早く育つトウモロコシなどを題材に土の中や根の様子を次々と撮影しました。静止画像の部分を最新技術で動画に直し、再度提供できたらと考えているそうです。



左：菊地さん。映画の冒頭で赤ちゃんがやわらかい土を掴んで遊んでいたのが印象的でした。

右：館野さん。草取り用に合鴨を飼って秋には鴨鍋のつもりが、情が移って現在も鴨は健在。鴨自慢の会話も...



## 第2部

「雨と土と農業の現場から」 館野廣幸さん

栃木県野木町で有機農業を営む館野さんには、土と水といのちについてお話ししていただきました。

近代農業の象徴として、筑波の科学博で展示された1本で1万個の実をつけるトマトの木を紹介されました。そのトマトは、エネルギー収支では全く採算が取れず、土にも還らず、果ては廃棄物になります。また、盛んに行われているハウス栽培では、ハウスの中は雨が降らないため、水は表面から蒸発し塩分や肥料が上に上がり砂漠状態となります。外気が遮断されて植物の栄養である炭酸ガスが不足するため、ガスコンロが焚かれます。これもエネルギー多消費の農業です。

日本の耕地は、大規模化が奨励されてきましたが、日本のように傾斜のある土地では小さい区割りのほうがリスク分散されます。昔の人はそこまで考えて耕地の区割りをして、多雨や日照りの年もどこかは実り、飢えずに済みました。さらに消費者が生産者と近接していることは輸送費用もかからず有利です。

一方で、有機農業は誤解されています。重労働といっても近代農業の1割増しです。草取りは得意な合鴨や微生物に任せます。種初めの低温処理や殺菌で丈夫な苗にし、水を深く張ると稗は防げます。朝、合鴨に少しのえさをやりに行くのは楽しいものです。冬に田圃に湛水すると夏草が生えず、やって来る鳥が糞をしてくれるので肥料もいりません。収穫量は少なめでも、生産物の栄養素は鉄やカルシウム、ビタミンなど決して少なくありません。

有機の「機」は、生命(機構)という意味があります。いのちでいのちをつくるのが有機農業です。田圃の収穫物は稲だけではなく、オタマジャクシやカエル、トンボもいます。人と自然がともに生きる方法がまさに有機農業です。先人の知恵に学び、「イワンの馬鹿」のように愚直に生きたいと語っていました。

(柴 早苗)





# 風

秋山眞芸実さんが

「ムラセ係長、雨水で世直し！」出版

ビジネスや経済からしかものを考えられなくなり、モノや金に絡め取られてしまった人々、仕事人間などに、もっとイキのいい生き方があるよ、と伝えたくて書いた本です。

村瀬さんと仲間たちの体を通し、生き方を通して物語りました。環境問題の根本、雨水利用の意味なども、頭で理解するのではなく、フィールドワークを疑似体験するように、体に染み込むようにわかってもらえるようにと思って書きました。どうぞご購入＆口コミをよろしくお願いします。

「書店に行ったけど見あたらなかった」との問い合わせをいただいています。出版した岩波書店は、買い取り制なので、書店からの注文がないと、本屋さんに並びません。八重洲ブックセンター、丸の内丸善、紀伊國屋、都庁の三省堂、錦糸町のくまざわ書店、文教堂、リプロには置いてあります。岩波書店・2310円

(秋山眞芸実)

## 雨水田んぼ&ビオトープ

雨水探検隊、6月11日(土)に田植えをやりませう



4月16日(土) すみだ環境ふれあい館の外に、約10名の作業姿の人たちが現れました。伊藤林さんがなにやら、指図しています。フェンスの一部を取り払う人、周りの木の枝払いをする人、あつという間に、水を張った水面が現れました。水は隣の駐輪場の屋根の樋を伸ばして雨を入れるようにしました。

## 大田区と鎌ヶ谷でタンクづくり実演

2月27日、大田区が主催する第4回エコフェスタ・ワンダーランドの会場の小学校で、東京マイコープ南部環境委員会の依頼を受け、雨水タンクづくりの実演と指導、国際会議に向けて宣伝など行いました。伊藤林、磯村、高原、村本の4人が出動しました。東京ドームの雨水利用を知っている子どもやタンクを積極的に作る子どもなどいて、頼もしい限りでした。

また、3月22日に鎌ヶ谷消費者の会が企画した「雨水タンクづくり学習会」の支援に行きました。ベランダでガーデニングに雨水を使いたい、鯉を飼っている池の水に雨水を利用したい、と熱心な受講者がレインキャッチや蛇口も上手に取り付け、あつという間に雨水タンクができあがりしました。元会員の臼山さんと松戸雨水の会の伊藤とみ子さんが、ご自宅の雨水タンクの事例やメンテナンスについて発表しました。それぞれ地域に根ざした活動をしている市民との交流は大切で、学ぶことも多く、たいへん勉強になりました。

(手づくりタンクプロジェクト 高原純子)



大田区中富小学校で雨水タンクづくり学集會

伊藤さんは雨水探検隊の隊長です。去年まで、雨水探検隊は市川市に出かけて、米作り体験をしていました。しかし、遠くてなかなか行けず、草取りなどは地元の人に頼んでいました。もっと身近で稲の世話をできるように、このすみだ環境ふれあい館の池を田んぼにしました。国際会議の分科会「雨の環境学習」と雨水探検隊が、いっしょにこの作業を行いました。実行委員の三井元子さんの紹介で、八潮市の土を分けていただいて田んぼに入れました。

6月11日(土)の田植え、その後荒川の自然観察を兼ねて魚を捕まえて田圃隣のビオトープに放す計画もしています。(伊藤林談；高橋朝子インタビュー)

## 2005年度 雨水市民の会定期総会 6月19日(日) ぜひ参加してください！！

雨水市民の会では、アジアの水危機（特にヒ素汚染に悩むバングラデシュ）に対する活動や、雨を尊び、雨水を活かすための国内および国際社会への情報活動、また子供たちへの働きかけなど、今年度も多くの課題に取り組んで行く予定です。1人でも多くの会員の皆さまの、こうした活動への参画をお願い申し上げます。

総会では市民の会が中心となり、1年余りをかけて準備してきた雨水東京国際会議の最後の詰めをするとともに、昨年度の総会で提起されたNPO法人化など、これからの会の新たな方向性についても議論したいと考えています。大変重要な総会ですから、みなさんぜひご参加ください。また、当日はかねてから準備していました「雨の絵本ひろば」の内覧会も催します。どうぞお楽しみに。

参加できない方は、同封の委任状を事務局へ6月15日(水)までにファックスまたはEメールしてください。また、会報を郵送している会員で、メール配信(カラー版)を希望の方は併せてお知らせください。

日時：6月19日(日) 午前10時30分～  
場所：すみだ環境ふれあい館(電話03-3611-6355)  
内容：2004年度活動報告・決算。2005年度事業計画・予算。雨水東京国際会議に向けての準備。長期的活動方針など。



・東武亀戸線  
小村井駅徒歩10分  
・JR 亀戸駅  
徒歩20分

### 会費納入のお願い

新年度を迎え、会費納入のための振替用紙を同封させていただきます。総会当日に直接お支払いいただいても結構です。よろしくご協力いただけますよう、お願いいたします。

## 雨アツマーレイ

マーレイ "murray" はタミル語で雨。2004年12月19日から29日にかけて大学生を中心としたメンバー10名でインド・チェンナイの "Rainwater Harvesting (RWH)" を視察し、その報告会を、3月6日(日)にすみだ環境ふれあい館で行いました。

報告会のスタートはレインセンターでいただいたフィルム「傘をひっくり返して雨を集めてごらん」の上映。まず、レインセンターでお話を聞き実際に見てきたインドのRWH事情について発表。チェンナイでは地下水の塩害化・地下水位低下そして絶対的な水不足から、差し迫った問題としてRWHの実施が推奨され、ついには条例化されました。NGOや行政と連携して地道な活動を行ったレインセンター館長シャカール氏が、8月の国際会議のために来日しますのでご期待ください。

また一方日本ではと、村瀬さんによる日本の雨水利用事情紹介につづき、辰濃会長、村瀬さん、徳永さんをお迎えして対話も行いました。さらに参加者を交えてのグループワークでは、チャイを飲みなが

### インド・チェンナイRWH視察報告

ら盛り上がりしました。”Rainwater Harvesting”の日本語訳では「雨来雨喜」(ウキウキ)をはじめ創意工夫に富んだ素敵な言葉がたくさんできました。ご参加いただいた皆様、どうもありがとうございました。(吉田明子)



グループで訳語を相談。年齢差が意外と新鮮で楽しかった。

### 編集後記

まちのあちこちが花の洪水。むせ返る新緑と花の香り。目にも鼻にも植物の生きる力が飛び込んできます。国際会議まで残すところ3ヶ月足らず。準備のメンバーの表情も熱意も、今が花盛りのように百花繚乱です。(morning)